

大空間 公共施設 公園 図書館

1. はじめに

現在、都市などの人が集まる建物密集地域が拡大してきており、様々な建物が建ち並んでいる。そしてそこではたくさんの人が目的を持ち、建物と建物を行き交っている。

しかしこういった人のたくさんいる建物密集地域には公共の場として自由に利用のでき、腰を下ろせし、ゆっくりと一息つけるような屋内の休息スペースが無いように感じられる。こういった密集地域で一息つこうとしても、どうしてもお金がかかってしまう。また建物密集地での建物はスリム化されており、目的以外の理由での利用がほとんどないと言っても良く、人々は常に建物に対して目的を持ち行動しなくてはならない。

そこで本設計では、多くの人々が自由に利用できる屋内休息スペースがあり、何も考えていなくても自然と足が向き、気軽に訪れることができ、自由に様々なことが行える公園のような空間を設計する。

2. 敷地概要

2-1. 敷地選定

ジェイン・ジェイコブズによると、利用される公園の具体的な設計条件として以下の4つが挙げられる。¹⁾

- ・複雑性 ・中心性 ・太陽 ・囲い込み

これらの条件を満たす建築が求められる敷地を選定する。

周辺に山形美術館や最上義光歴史館、霞城公園といった様々な施設があり、これら施設からの利用者が来る理由は多様性となり、建築に複雑性をもたらす。またそれら文化的施設が複数ある中、その中で知識を共有し合える中心的な場がないので、本建築に中心性をを持たせることができる。太陽としては、回りに背の高い高いものが少なく、日を妨げるものはないので、多に建物内に取り込むことができる場所となっている。そして美術館や歴史館といった個性のある施設が並んでいるので、本設計にも個性があれば、そこでの活動が他の所の活動と違うものになり、特別なものとなることができる。

以上の理由から敷地を山形県山形市霞城公園東口近辺に選定した。

2-2. 設計対象敷地及びその周辺

霞城公園は山形城址二の丸の堀と石垣などの遺構を中心とした範囲を公園としたものであり、山形市のシンボリックな構造物である。

山形美術館は主に、日本及び東洋美術、郷土関係美術、フランス美術を展示している。



写真1 美術館



写真2 歴史館

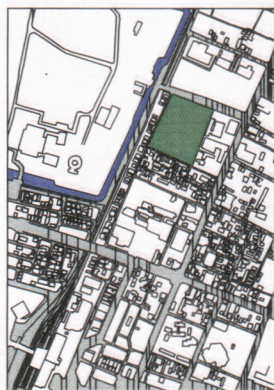


図1 敷地図

3. 基本コンセプト

①内部空間

周辺には美術館や歴史館があり、文化的地域となっている。しかし周辺を調べた所、それら知識を深めるための図書館や、知識の交流を図るための室内空間が無い。これら周辺地域に無く必要だと考えられる施設を入れることにより補完し合える関係となり、利用目的の多様性が出て建物自体に複雑性もたせることができる。また建物内に人が留まりやすい交流の場をつくることにより、生活としての中心の場となり、建物を地域としての中心化を行える。

次に太陽について、屋根をガラス張りのものとし、太陽光が入ってきやすくする。これにより建物内全体に太陽をいき渡らせる。そして囲い込みについて、図書館やイベント広場、子供の遊び場といった周囲には無い独自の空間を作ることによって、そこでの活動が重要なイベントのように見え、人々を中に誘い込むことができる。

②外部空間

建物の外部、北と南にはそれぞれ広場としてのスペースが設けられており、北側の前広場は主にオープンカフェのスペースとして利用し、たまにフリーマーケットなどを開催する場所として設計している。

南側の広場は現在、近隣の子どもの遊び場として機能しているので、このまま子供の遊び場として残しておきながら、その他近隣施設との回遊性を高めるためのアプローチとする。

4. 最終設計案

主に建物は中央を通る道によって、西部分と東部分で分かれており、それぞれ入っている施設が違い、利用のしかたや雰囲気違う空間となっている。

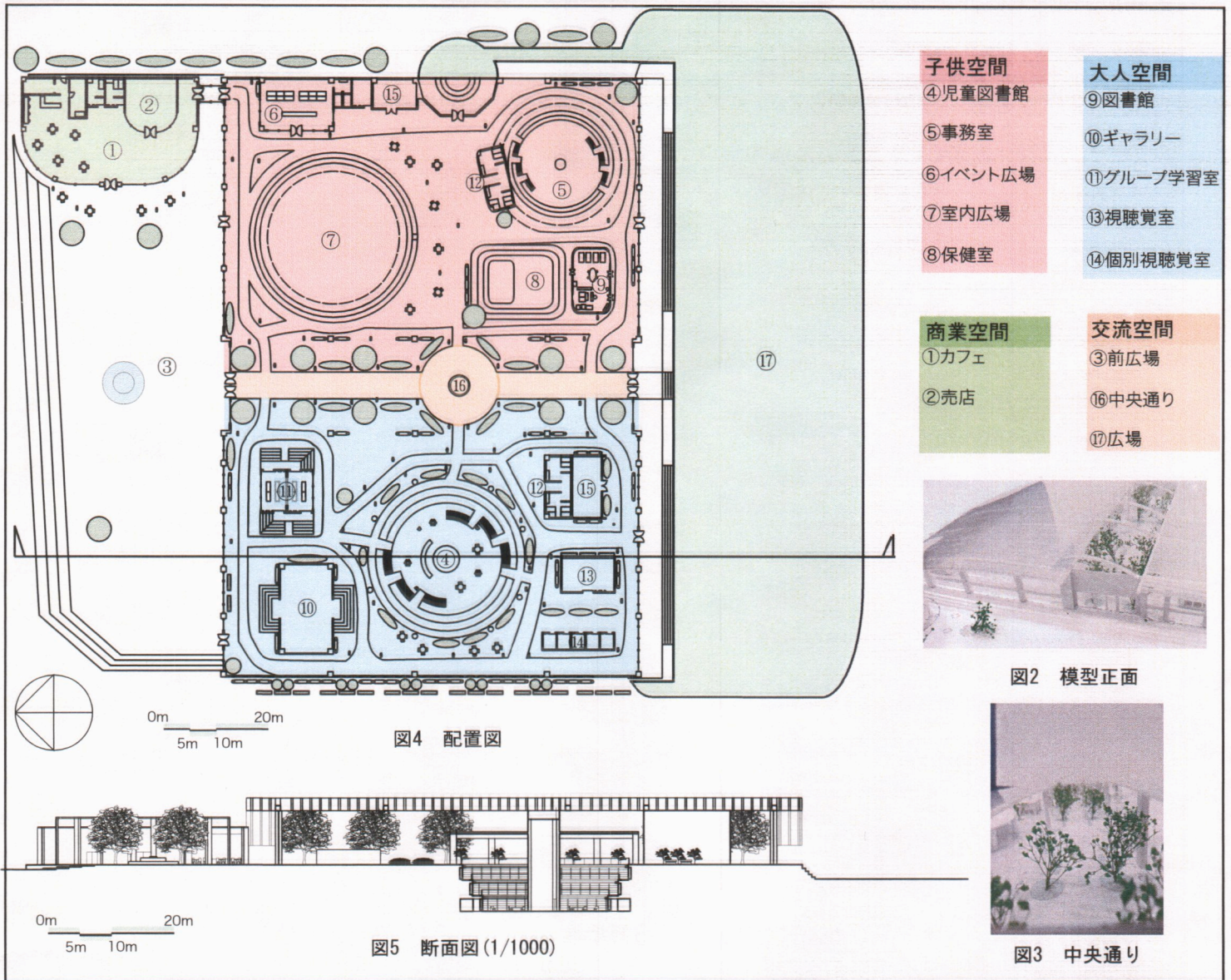
①西部分 (大人空間)

建物の機能として、公園のような機能だけでは壁を隔てた空間に人が入ってくる目的としては弱いと考えられる。

そこで周辺施設を見た時、美術館や歴史館といった文学的なものがあるので、これに沿った公共施設としての機能を内側に入れると事を考案し、もう一つのメイン機能として図書館を入れることにした。

図書館は地下三階のもの段々と階段状になっており、吹き抜けの形をとっている。これにより地上部分から図書館全部を見渡せ、中からは高い天井によって開放感を感じることができる。また、形が円柱状になっているので中は本に囲まれる空間となっており、そこにいだけで図書館を楽しむことができる。

その他に、映像資料などを見たり、小規模の発表の場として利用することのできる視聴覚室や、会議などを行ったり、複数で調べものをする際などに利用できるグループ研究室、山形美術館では扱っていない市民などによる作品を展示するギャラリーなどの施設を設置してあり、主に大人が利用する静かな空間となっている。



②東部分(子供空間)

東部分は、児童図書館や砂場が入っている室内広場があり、子供が遊べる場所と学べる場所が設置してある。他にもイベントなどを行える広いスペースも確保してあり、賑やかな子供のための空間構成となっている。

子供の空間と一緒に子供空間には、イベントの管理や、建物全体の管理を行う事務室が設置されており、また子供が怪我をした場合の治療や、悩みの相談をすることができる保健室も設置されている。その他に、商業空間につながる通路があり、外に出ずとも行き来することができる。また病院側からの入り口も用意されているので直接病院との行き来ができるようになっている。

③商業空間

対象敷地周辺は美術館などがある文化地区なのにもかかわらず、カフェといった飲食店が近くにないことがわかった。そこで本設計では、近隣の住民のためにも飲食のできるカフェと、日用雑貨などの様々なものが買える売店を入れた商業的な建物をメインの建物とは少し距離を置いた場所に配置する。また前広場などのスペースのある場所でフリーマーケットなどのイベントも行い、周辺地域の活性化を図っていく。

④交流空間

中央の大きな道には街路樹が植えてあり、自然のアーケードをつくり出している。これにより室内でありながら屋外のような自然を演出し、人が通りたくなるような空間となっている。また道の中央部分に少し開けた空間をつくり、そこで待ち合わせをしたりする、人のたまり場として設置されている。

またスペースを広く取っている前広場や広場があり、前広場では主に商業的交流を行い、広場の方では子供の遊び場として開放し、親との交流または他の公園利用者との交流を主に行う場所として配置されている。

5. まとめ

本設計では、利用される公園としての具体的な条件である複雑性、中心化、太陽、囲い込みの4要素を挙げ、これに沿うような建築内容を室内へと収め、公共施設としての新しい形式の公園を提起した。

【引用】

(1) 宮崎洋司：ジェイコブズから見た良い公園、良くない公園
ランドスケープ・デザイン no.81 2011年10月23日